



「街頭テレビで熱戦の中継に見入る子どもたちです。彼らの心をもつかんだ、まさに“夢の祭典”でした」写真提供/毎日新聞社（昭和39年）

オリンピックピック村で、牛乳を がぶ飲みする女子選手に驚きました

昭和39年、戦後復興後の日本は、アジアで初めて開催されるオリンピックに向けて活気に満ちていました。首都東京の交通網——高速道路、羽田空港と都心を結ぶモノレール、東京・新大阪間を4時間で結ぶ東海道新幹線が建設され、「オリンピックまでに」を合い言葉に皆が一丸となりました。

「女子要員は水色のスマートな制服」などがあります。

当時の『栄養と料理』にはオリンピック関連記事が続きます。学園の専攻科（短大卒業後1年間）の学生80名が女子選手村の食堂運営要員として、調理師科の学生40名が厨房要員として手伝うことになったのです。学園内でオリンピック特別講義があり、サービスや食事マナー、メニュー、英会話など各専門家から指導を受けるといふ貴重な体験をしました。記事を拾うと、「一日約7000食の用意」「選手の食事は一日6000カロリー、給食費は20000円」

私は女子選手村の食堂を見学しました。たいそう驚いたのは立派な体格の海外女子選手が牛乳1ℓを容器からがぶ飲みする姿です。当時の日本人は貧弱で「あの小さな日本人」といわれたものでした。住環境の変化や食生活の向上で今では身長もぐんと伸び、欧米の運動選手にひけをとらない体格になりました。世界大会でもトップクラスの成績を収めています。

私の昭和

香川芳子 女子栄養大学学長